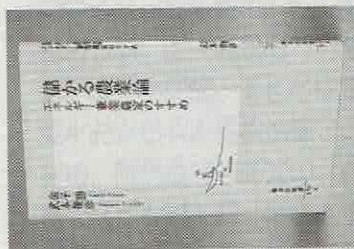


2014年(平成26年)12月15日(月曜日)

儲かる農業論

金子 勝、武本 俊彦 著

本書は「農業が生き残るには農業だけをやる農業者の経営規模をできるだけ大きくすればいい、それが農業の国際競争力を高める道である」とするこれまでの食や農業に関する「常識」を覆すことを意図した意欲作である。「農産物価格が継続的に下落を続けるアフリカ経済のもとでは、借金をして規模を拡大し専業農家になれば、かえって生活が破綻する危険性が増します。むしろリスクを分散するた



めには兼業を選択する方が理にかなっている」のであり、歴史家網野善彦の考察も踏まえて、「昔から農民は専業農家というよりも兼業農家であった」として兼業農家を再評価するとともに、あらたな時代に対応した兼業スタイル」の提示を試みており、攻めの農業の流れに重要かつ大きな一石を投じている。

あらたな「兼業スタイル」は「儲からない産業」とされる農業に代表される小規模な自営業者に「儲かる経営モデル」の成立を可能にするものでなければならぬが、それが「6次

再生エネ活用の「兼業」を推す

農的社会デザイン研究所代表 栄一 蔦谷

産業化」であり、「エネルギー兼業」である。特に農山漁村地域に大量に存在している太陽光・熱・風力、小水力、地熱、バイオマスといった再生エネルギー資源を活用しての「エネルギー兼業」の途を推す。小規模分散ながらスパコンとICTの進展がこれを支え、安定・効率化だけでなく「儲かる経営モデル」の成立を可能にしたとしている。

そしてこの「エネルギー兼業」は「自律」的兼業」であることが期待されている。第一に事業の利益を地域に還流・循環させ地域での雇用と所得を拡大していくことが重要であり、「エネルギー兼業」によって農家は経済的自律をはかっていくこと。第二に農家も「地域に主体性をもって関わり、地域住民とともに自らが参加し、地域の将来を決定」しながら「社会的価値の実現の先頭に立つて地域の自律に絡んでいくこと」を強く求めている。「儲かる農業論」のベースには「自律」的兼業」論が脈打っている。共感するところは多い。

(集英社新書 756円)

かねこ まさる 慶應義塾大学経済学部教授。

たけもと としひこ 食と農の政策アナリスト。